聖刻文字と解読不能な他者

神 尾 達 之

聖刻文字の解読の歴史は長いが，18 世紀末にはこの問題をめぐって二つの動きが観察される。一方において，ドイツロマン派は聖刻文字に近接する語彙を積極的に採用した。その際，聖刻文字を be-zeichnen する主体としては神が措定された（ティーク）。書物としての自然を記述する言語であった聖刻文字は，読者である人間には解読不可能なものとされたが（アイヒェンドルフ），しかしまさに解読のための鍵の不在こそが，無限の解読可能性を保証した（ノヴァーリス）。聖刻文字のこのようなレトロで神秘主義的な受容は，内なる自然の書物としての夢に関係づけられることで，無意識をも射程に収める（シューベルト）。そして，今までは神が占めていた be-zeichnen する主体の座を人間が簒奪するに及んで，聖刻文字という表象はプログラム言語の能力を含意するようになる（ホフマン）。他方，1799 年，あのロゼッタストーンが発見され，それをきっかけにして，一挙に聖刻文字解読の動きが高まり，ついに 1822 年，シャンポリオンがその解読に成功した。聖刻文字が解読され，しかもその大部分が表音的性格を有していることが明らかになってしまった以上，無限の解読可能性の夢を見続けることはできない。シャンポリオンによる聖刻文字の解読は，ドイツロマン派を隘路に立たせることになる (Fr. シュレーゲル)。シャンポリオン以前は，聖刻文字で記述される自然は，解読不可能な他者だった。それは，デカルト以来の自然の非-他者化の欲望に抵抗する残された数少ない領域であったのだ。解読する理性にそれでもなお抗う者は，聖刻文字の死を確認しつつ，神に代わって，自らの身体の移動によって大地に解読不可能な痕跡を残そうとする（ビューヒナー）。だが意味なき彷徨によって解読不可能なテクストを外部に印づけることができない者は，自分の脳髄の中に読めない図柄を描くしか方途がない（アヴェロンの野生児，カスパー・ハウザー，ヴォイツェク）。今世紀の初めには，そのような図柄が描きこまれる空間としての心が，無意識という名称を正式に得，解読されるべき聖刻文字のテクストとして表象されるようになる（フロイト）。さて，この考察の出発点から二世紀を経た今，解読不可能性の夢は失効し，解読主体である人間自身すらもが記号の集積体（ヒト）として解読されつつある。その限りで聖刻文字は表象として出番がなくなる。だがしかし，いやだからこそ，「現実的なるもの」のエージェントが汎解読可能性のオプティミズムの皮膜を破ることがある。